

日時：平成21年9月15日（火）15:00～17:05

場所：山形県建設会館 中会議室2

## 1 開会

## 2 委嘱状交付

委員に委嘱状を交付するとともに、事務局から委員の紹介を行った。

## 3 教育長あいさつ

委員の皆様方におかれましては、何かと御多忙のところ御出席をいただき、心よりお礼申し上げます。この懇話会は、県教育委員会が進めております第5次山形県教育振興計画に基づく施策について、各分野でご活躍されている有識者の方々より、幅広い視野からご意見をいただくために、設置しているものであります。

このたび、委員をお引き受けいただきました皆様方に、重ねて感謝を申し上げます。

各学校におきましては、夏休みも明けて、例年であれば、体育祭や文化祭など、児童生徒は各種行事や学習に充実した生活をおくる時期であります。しかしながら、本年は皆様もご存じのように、8月5日に県内で新型インフルエンザの集団発生が確認されてから、学校においても各地域で集団発生が確認されており、秋冬にかけて、さらなる感染拡大が危惧される場所でもあります。感染防止対策につきましては、各学校はもとより、各市町村教育委員会にも予防の徹底と、万一、集団発生した場合の学校閉鎖など、迅速かつ適切な対応をお願いしているところでありますが、今後とも万全を期していく必要があると考えているところであります。

さて、県教育委員会では、「5教振」の目標であります、「知徳体が調和し、『いのち』輝く人間の育成」を目指して、「いのち」「まなび」「かかわり」をテーマとした各種施策に取り組んでおります。特に、一人一人の子どもへのきめ細かな指導を目指して、中学1年生まで実施して参りました「少人数学級編制『教育山形「さんさん」プラン』」につきましては、今後、中学3年生まで段階的に導入し、義務教育9年間を通した施策として充実を図るとともに、今年度からは喫緊の教育課題に対応した施策として、小学校低学年における副担任の配置や、小学校5年から中学校1年を対象とした理科、算数・数学、英語の教科支援員の配置、中学校における別室登校生徒に対する学習支援教員の配置を併せて実施しているところであります。

また、本年6月にとりまとめた「山形県中高一貫教育校設置構想」につきましては、現在、県内4ブロックで説明会を開催し、広く県民の皆様からご意見をいただくとともに、公立高校の再編整備につきましては、酒田新高校（仮称）の平成24年度開校に向けた準備や、北村山地区における高校整備計画の策定、西村山地区、西置賜地区における高校教育の在り方等についての検討を進めているところであります。

こうした現在進めております各種施策の基本となります「5教振」も、平成17年度にスタートしてから、5年目となり、10年計画の中間年を迎えております。本日は、昨年度の実績であります平成20年度の「教育委員会活動の自己点検・評価」について、ご意見をいただくこととしておりますが、県教育委員会といたしましては「5教振」のこれまでの施策の成果や課題について、しっかりと検証し、計画後期につなげていくことが重要であると考えております。後ほど事務局から「5教振」に基づく施策の取組み状況や課題について、説明があると存じます

が、委員の皆様におかれましては、こうした点について、ご理解賜りますとともに、それぞれご専門の分野で、幅広い視点から積極的なご提言をいただきますようお願い申し上げ、ご挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

(その後、事務局から、懇話会の趣旨、スケジュール等について、資料1により説明。)

#### 4 座長選出

協議の座長は、設置要綱の第4条に基づき、委員の互選の結果、池田委員に決定。

##### ○ 座長あいさつ

私はじめてで不慣れですけれども、ご指名ですので、委員の皆様には忌憚のない御意見をいただきながら進めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### 5 協 議

##### (1) 平成20年度山形県教育委員会活動の自己点検・評価に関する意見について

池田座長： それでは協議に入ります。はじめに(1)の「平成20年度教育委員会活動の点検・評価に関する意見について」、事務局から趣旨等について説明をお願いします。

事務局： (資料2・3・4により説明)

池田座長： ただ今、事務局から点検・評価結果について、説明がありましたが、委員の皆様から、全体を通してご質問・ご意見をいただきたいと思いますので、お一人3分を目処に、ご発言よろしくお願い致します。なお、事前に委員から意見を記入いただいたシートがお手元に配布されていますので参考にしてください。

内ヶ崎委員： 私は精神科の開業医ですが、子どもや学校の先生も来られ、診ているとゆとりがない感じがします。「いのちの教育」に関してですが、死にたいという生徒が多く、「死にたいなどといっただめだよ」と言う、「どうして死んではいけないの」と言ってくる。彼らにはいのちが大切だという理屈は通じなくて、そうなるのはこれまで周囲の大人から自分が大切にされた経験がないからのようです。「とにかく生きてくれ」と言って、先延ばして治療につなげているのが現状です。学校の教師方も、資料4に記載のように多岐にわたってやっておられますが、疲弊しきっていて、忙しすぎて子どもと向き合えないのではないかと思います。ここに書いてある目標と、現実の情緒的なコミュニケーションとの乖離はないか、もどかしさを感じます。一医者として、彼らには「充分よくやっているね、がんばっているね」と言ってあげています。

國眼委員： 「キャリア教育」に関してですが、キャリア教育の目的は自立した社会人・職業人の育成にあると思われれます。キャリア教育の部分の記述は、紙面の都合もあるのでしょう

が、職場体験学習に限定した捉え方がなされているように感じます。現下の窮屈なカリキュラムではありますが、社会人・職業人としての生き様、すなわち、何を考え、何を工夫し、何を得ているのかを知ることが、将来を肯定的に思い描く力になると考えます。単に職場を見てきた、仕事をやってみたということで終わらせずに、働く大人と語る時間をプログラムの中に入れていただきたいと思います。また、成果の発表も、報告書の作成や、一部の生徒の発表に終わらせるのではなく、地域の方や後輩に向けて語る、校内に展示するというのも「社会人基礎力」の形成につながると考えられるので、成果を、何校で実施したという量から、どのように実施したか、成果を地域内で共有しているかなど、質的側面でも見てほしいと思います。高校のインターンシップも、ぜひ希望者を増やすよう働き掛けを工夫してほしいです。現在は職業科を中心に実施されているようですが、職業イメージが湧きにくく、フリーター率の高い普通科こそ実施していただきたいです。キャリア教育のプログラムの策定は、各学校においてキャリア教育の必要性を認識するに効果的であったと思いますが、さらに一歩進めて、その効果の検証へと進むことを期待します。大学でキャリア支援の仕事をしていて最も課題だと感じるのは、「どうせ無駄」、「そんな難しいところは無理」、「このままでいい」といった、自己効力感の低さです。トライする前から諦めてしまう、現状を変えることが怖いといったこれらの心情は、自分の可能性を自ら閉じることにつながります。キャリア教育のねらいは、自分の未来を自ら切り開く気概の育成でもあります。「いのち」、「まなび」、「かかわり」を5教振の旗印にしている本県ですが、「いのち」を単に生命といった捉え方に限定するのではなく、「ひとの役に立てる自分」、「自分の持ち味、できることに気づく」、「出会いの中で得る感動」など自己効力感、自尊感情に関わる教育活動へ進めることによって、キャリア教育へもつながると思います。自分を大切にできなければ、社会の中で自分を活かすこと、すなわちキャリア発達もおぼつかないでしょう。自分の持ち味に気づく、人の役に立つ自分を実感するなどは、キャリア教育の中だけでなく、山形方式のY Yボランティアに代表されるボランティア活動の推進も有効だと思います。「スクールカウンセラー配置事業」についてですが、県内中学校にはスクールカウンセラーや教育相談員の配置が進んできましたが、高校ではまだまだ不十分であると思われれます。県立高校の約半数しかスクールカウンセラーが配置されていないこと、また現在、1校当たりどの程度の時間が当てられているのか明記されていないのでわかりませんが、月1回程度が多いと聞き及んでいます。中には月2回、週1回と恵まれた高校もあるようですが、そういう学校は独自に経費をやりくりしているようです。不登校やいじめといった文科省の統計に表れている行動だけではなく、今、思春期の子どもたちは、リстокット、神経性食思不振症（(注)拒食症のこと）、鬱症状など様々な問題に直面していますので、ぜひ彼らのこころの成長を支援するためにも、一層の手厚い配置をお願いいたします。「食育」についてですが、幼稚園、小学校は、従前どおり保護者に向けて一層促進していただきたいし、特に、自分を大切に、自ら育つことを伝えるためにも、中高生を対象に食育を促進していただきたい。単に食べることを栄養バランスや食事量にとどまらず、食べるという行為の持つ意味まで踏み込んで教育していただければありがたいです。山形は食材の豊かな地域なので、山形の豊かさを気づくきっかけになるのではないかと思います。岩村暢子氏が「変わる家族、変わる食卓」や、「普通の家族がいちばん怖い」で著しているように、食事はしていても、そこに家族の関わりが見えてこない食卓も多いようです。

齋藤委員： 社会教育に係る項目について、気づいたことを申し上げます。子どもは、学校

で学んだことを活かしながら様々な地域活動の場を通して、自らの力で、暮らしを切り開く知恵や力を身につけています。力とは、コミュニケーション能力、生きる力、いのちを大切にできる力、社会力等です。『コミュニケーション改革』の推進、「『いのちの教育』の推進」、「『社会力』の育成等」の3項目に関して、地域活動の場で展開する場合の課題と思われることについて述べます。文言の随所に「学校、家庭、地域」が出てきますが、「地域」は、具体的に何をどうするのか、住民それぞれがどれだけ理解できるのかを考えると少し不安です。地域で学校や子どもを支援するためには何をどうするのか、それぞれが、「わかった、できるぞ」と確信した時にはじめて協力ができるものです。地域で子どもを支援する仕組みは、PTAだけでなく、地域住民の核になっている公民館を巻き込むことも大事であります。今、公民館は、学校や子どもを支援できる地域コミュニティづくりを目指しており、ぜひ、公民館を活用する仕組みを創造してほしいと思います。学校、家庭、地域との連携の推進、そして役割等を具体的に実践する時に参考にしていただきたいことは、「各種組織団体等と連携し、具体的な展開を図ること」、「子どもが積極的に地域活動に参加できる仕組みづくりを工夫すること」、「公民館を拠点にした積極的な活動の展開を推進すること」の3点です。

寒河江委員： 「キャリア教育の推進」のところでは、「就職内定率の向上と高度な技能検定資格取得者数の増加」の目標が未達成となっておりますが、経済低迷、世界的な不況は雇用状況の悪化は、先生方の努力の範囲外の外的要因によるもので、これをもって未達成というのは現場の先生方がかわいそうな気がします。「障がい者雇用の推進」のところでは、ここも未達成な訳ですが、弱者救済の面もあるわけなので、県は本腰を入れて行うべきという気がします。雇用率のアップを期待します。「世界遺産登録に向けた取組み」については、未達成な訳ですが、市町村にやる気がないからやめるんだとも受け取れる表現になっています。むしろ、知事の意向でやめるんだと書いたほうがよいのではないかと思います。

柴田委員： 達成・未達成の評価は大事なことですが、何回やったという表面だけの評価となっていないかという気がします。子どもが、家庭が、どう変わったのか、本質的なところを評価する必要があると考えます。私は、大学で学生に考えることを身につけてほしいために、学生には半分教えて、半分意見を言わせるようにしています。今年8月に、学生と1週間、企業を回った際、夜遅くまで議論し、レポートを書かせました。一週間やったら学生はものすごく変わりました。今時の子どもはすばらしいと感じました。最初は自分の思ったこと、考えたことが話せなかったのが、一週間後、一人一人が輝くような力を付けていくことが感じられました。教育の中で、小学校の頃から、現実的に物事を考える力を身につけておかないと、暗記をして終わりでは、良くないと思います。先生が、親が、地域が、いかに熱く語るかが大事だと考えます。学生は、教師の情熱をわかってくれます。「キャリア教育」は、企業を見ただけでは何もならないので、企業経営者夫妻の話聞くことが重要です。

鈴木委員： 私の提出した意見資料1でお話いたします。柴田委員の意見は全くそのとおりだと思います。それを私は、別な観点からお話し、また、山形県の教育の理念、方向性に加えてほしい柱、欠けている柱について、お話ししたいと思います。資料3にある教育委員会活動の重点項目の1から4までの「質の高い能力を育てるための質の高い教育」の内容に、人としての「自信、誇り、心の強さ・美しさ」を育むという視点が足りないと思い

ます。5から6までの「山形県の自然風土と伝統」については、それを実感として理解し、かつ心に響く言葉や体験で伝えられる教師・大人を増やしてほしい。そして、山形の素晴らしさを誇らしく語れる若者を増やすということが理念として必要だと思います。今日はこの2つを、ことばを変えながら説明していきます。まず、資料4の「教育委員会の活動状況」を読むと、月1回の県教育委員会の報告・議事を見る限り、事務手続きの多さに驚きます。確かに必要な手続きなのでしょうが、重点項目に沿った検討にこそ時間をとれる工夫をしていただきたい。「コミュニケーション改革」では、コミュニケーションが大切なのは当然だが、5教振の「かかわり」の一部なのか、別枠なのか、一体なのか、まだ私は理解できていない。また、コミュニケーション改革の中にはいろんな柱があるわけですが、その最大の柱に、「共感」、「絆」といったことばを加えてほしい。「いのちの教育」では、達成目標として「できるまで努力する」という設定はおかしい。むしろ、全国学力・学習状況調査の「自分には良いところがあると思いますか？」という問いには、山形県では小学生の約30%、中学生の約20%があてはまると回答していますが、この問いに対して「あてはまる」と回答した児童生徒の率の方が妥当だと思います。「いのちの教育」には、私もいろいろかかわってきましたが、「心の安定」や「心の繋がり」が重視されすぎていて、「心の強さ・美しさ」を育むという視点に欠けているのが気になります。だから、全国調査の「自分には良いところがあると思いますか？」のような結果になる。そここのところを考えて、子どもたちの「自信」や「誇り」が醸成されないような気がするので、「心の強さ・美しさ」を出していくべきと考えます。先ほど内ヶ崎委員がおっしゃった「死の実感」に対する教育を、私は5教振のときに取り込んだつもりだったのですが、最近は抜けてきている気がします。私の参考資料1は、村山地区高等学校PTA研修会で話したのですが、その6、7頁に山形県の実態を書いております。「少人数教育の推進と効果検証」では、達成目標に、「よくわかる」、「大体わかる」の回答割合をもってきていますが、もう一つ、「先生が大好きだ、尊敬している」を足していただきたい。要するに、学習だけではなく、心が通い合う人間関係づくりも大切ですということです。小学校なら、僕は先生が大好き、中・高生なら、僕は先生を尊敬しているということ。「社会力の育成等」では、大人対象の事業が多くて、肝心の子どもや教師対象の事業がないということが気になったのと、達成目標としては、事業への「参加人数」より、「役に立つ内容で、今後活かせるという感想」がどのくらいあったというのが達成目標としては妥当であり、あるいは2つ達成目標があってもよい。「食育の推進」では、ここに書いてある以外の観点から言うと、食育は、生活リズムと一体で考えていかなければならない。だからこそ文科省が、「早寝、早起き、朝ご飯」を打ち出してきたのは意味があることだと思います。寒河江・西村山地域のどこの小学校でも「早寝、早起き、朝ご飯」キャンペーンをやっています。私は小学校の校長先生方に言っているのですが、これを「県民運動」にしよう。すなわち、「親は子供と一緒にご飯を食べる」、「子どもたちと、じいちゃん、ばあちゃんと一緒にトランプ、一番楽しい“大貧民”をする」、「一緒にお風呂に入る」、そして、ちょっとテレビを見るのを休んで「子どもが寝るときは親が絵本を読んで添い寝をする」。これを小学校低学年のときにやってあげよう。私はこの4つを県民運動にしてほしいと考えています。これは、親が自分の時間を少し割き、子どもと言葉を交わし、共感し合あう時間を楽しみながら親子の絆を育むということであり、コミュニケーション改革の根幹にも通じる運動だと思います。コミュニケーション改革を一生懸命やるのだったら、これに焦点を当ててほしい。「特別支援教育の推進」では、これはここ数年一生懸命やらなくてはならないことですが、ちょうどいい機会ですので、スポーツ系の部活動の顧問で、特に指導の厳しさで知られる

教師にこそ、特別支援の担当を任せて欲しい。小さき者や弱者と関わり、学ぶべきことは多いはず。そういう意味では、将来校長先生になるような、若い高校教師で優秀と言われる先生こそ、最低でも2、3年間、県立霞城学園高校に赴任させるべきだと思う。

「高等学校の再編整備」では、苦勞している、丁寧に進めているのは分かるが、私個人的には、県は設置者ですので、もっと指導力を発揮し、誰もが反論しづらい将来を見据えた設計図を提唱しても良いのではないかと。「英語コミュニケーション能力の育成」では、本気でやるのだったら、帰国子女や海外学校の卒業生が山形にも結構いますので、そういう人たちが教育学部に入学しやすいシステムを作り、そして彼らを教師にする。例えば、立教、上智、青山学院などの大学は、そういう若者たちがいっぱいいる。しかし、山形大学の入試要項を見ると、そういった若者たちは弾き飛ばすようなものとなっています。本気で考えるのだったら、そういった若者たちが山形大学地域教育文化学部に入れられるようにしてはどうでしょうか。「高い志を持つ生徒の自己実現に向けた支援」では、確かに高い志は大切ですが、ペーパー学力の高い学生に必要な支援は、予備校の先生に授業をさせるのもよいが、「勉強」よりもむしろ「人間性」だと思います。例えば、西郷隆盛、河井継之助、新渡戸稲造とかの、偉業や生き様を語ってあげた方が効果的だと思います。そういった人たちの生き方を語る若者を増やすこと。高い志を持って医者になるなら、政治家になるなら、霞ヶ関に行きたいなら、県庁を担いたいなら、そういうことの方がよっぽど大事だろうと思います。必修科目でない世界史を外して勉強させるような高校教育では困るのであって、逆に、東大に行くんだったら、絶対に世界史を勉強してから行けと言うような高校であってほしい。「キャリア教育の推進」では、私も10年間、中学、高校、大学生を受け入れていますけれども、中高生の職場体験は、体験先の企業にあまりにもお任せであり、行かせれば何とかやってくれるだろうというふうになっている。どういうことを実感・体験させたいのか、指針や理念を企業側にもうちょっと提示すべきだと思います。企業主の集まりで、職業を通じて人格形成・地域貢献を目指すロータリークラブに、こういった企画を任せるというのも有効です。実際、左沢高校では西村山郡の4つのロータリークラブが全面的に支援するなど、よいインターンシップの取組みを行っています。「教員評価・学校評価の拡大」では、学校評価については、私自身も関与して作成した「山形県学校評価システム」の理念が形骸化しつつあるような気がします。学校評議員とか学校評価委員というのは、学校を審査、コメントする委員ではなく、学校のために一肌も二肌も脱ぐような委員の集まりのはずです。しかし、恐れていたとおり、「評価」ということばが独り歩きしている。ここで一度、「山形県学校評価システム」を評価しなおして、立て直す時期だと思います。「公募による校長の登用」では、公募による校長は数名を知っていますが、私はやはり、山形県で就労して、PTA活動などもきちんとやっていた人材を登用すべきだと思います。言い換えれば、山形県の学校現場もある程度は分かっている異業種出身のリーダーこそ、校長に登用すべきだと思います。新しい風は大切ですが、学校や地域、保護者との波風や嵐となっている面も否めません。「世界遺産登録」では、取組みが中止になったのでコメントはないですけれども、先ほども言ったように、山形県の素晴らしさ、最上川で言えば、最上川の恩恵を誇れる、語る若者を増やすという理念、目標をもって取り組んでほしいと思います。以上、お話いたしました。理念、目標をもう一回見据えて、それに沿った検討をやり直すべきだと思います。

無着委員： 私たちPTA・母親委員会では、「コミュニケーション改革」には共感して活動しており、心通わす人との関わり、そのつながり、関わり喜び合うつながる心という点におい

ては大事にしなければならないことと感じております。そして、教育の原点は家庭教育にあるということ、子どもたちの心を育てることの大切さや、支える親同士のつながりや学びということも、コミュニケーション改革の取組みの中に含んでいただいております。育み合うという点において重要なものを持っていると思います。私たちは、研修の場が限られてはおりますが、大勢の中や定例の大きな集まりで話になったこと、課題等は、各郡市PTA連合会に持ち帰って、自分たちのところではどうだろうかということの評価・検討して活動を進めております。子どもたちが生きる力を育む上では、子どもときちんと向き合える親、先生方、周りの大人たちがしっかり学ばなければならないと感じております。「教員評価・学校評価」に関しては、達成率100%ということですが、子どもたちや保護者のお互いの成長の糧になり、励みになるようなやり方が望まれると、常々思っております。やれ学校がどうだとか、あの先生がどうだとかを意識してしまう保護者も中にはいるようですが、ほとんどの保護者たちは、一生懸命に子どもたちと向き合おうという気持ちでいるはずで、「食育」に関しては、先日宮城県で開催されたPTA全国大会でも、「早寝、早起き、朝ごはん」がうたわれており、東北大の川島隆太教授は、その時の講演の中で、朝食欠食率は減っているが、その質を問うものに転換していくべきと話していました。また、1日10分でもよいから、親が子どもと向き合うことが大事であり、それが将来の子どもたちを育てる力、生きる力を育むものになるとも話していました。そうしたことを母親委員会・PTAの研修の中で伝えていきたいと考えております。全てにおいて大事にしなければならないのは、目先の、今の子どもたちの姿だけではなく、もちろん、子どもたちの日々の成長は楽しみながらも、将来の生きる姿を思いやる教育、関わりではないかと思っております。「障がい者雇用」では、一般就労がたいへんな状況にある今、ましてや障がいのある者にとってはなおのこと、というのが現実だと思っております。娘は、先ごろNPO化しました。「みちのく屋台・こんにやく道場」という障がい者がつながりながら就労していく場で就労させていただいています。働きたい、社会に出たいというのは、健常者も、障がいのある者も同じだと思います。行政からの支援、温かい応援があれば、今後またいろいろな活動、団体が出てくると思っております。

池田座長： 評価については、各委員の皆様方から、ご自身の教育理念も含めまして、5教振につきまして、評価というよりも、それぞれの理念や教育観というものをお話しいただきました。私の意見は、事前に書かせていただきました。私は、今は大学に籍を置いていますけれども、昨年春まで高校の方で勤めていました。また7年ほど教育行政の立場で携わっておりました。5教振は5年目ですが、自分たちが理念とする、よしと考えること、それを5教振という形にして、その力を借りて進めていくということで、私は5教振の1年目から学校現場にいて、努力というか施策の方向といった面では、ある意味、大きな成果あげているのではないかと思います。ただ、10年間を見通した、10年間スパンでの振興計画は今の時代にどうなのかということです。後半の議題にもあるように、見直し検討について来年度から行われるということであるようなので、時代の流れに、地方がどうやってついていけばいいんだろうとことが、現実が目の前にありますよね。そういった意味で、これまでの体制がずっと続いてきたという経緯からすれば、10年一昔と言われますが、10年間で一つの計画を実践し、それを形にしていくんだという、その10年というスパンが、はたして今の世界の動きを見ても、日本だけでは動いていない訳であり、ちょっとした遠い世界の話しでもすごく私たちの生活にも教育現場にも影響があります。こういう時代の認識からすればどうなのか。今回、5教振を全部読ませてもらいましたが、4教振の感性教育をベースにして5教振を作成して、その基盤に立って、

5教振の「いのちの教育」がなされているはずですが、それが時間の経過と共に、教育に関わる全ての社会の動きの中で、子どもの変化というのがとても激しい。そういう子どもたちに携わる大人にも、ギャップが如実に表れます。今日の皆様方の意見を聞いてみますと、そのような変化、ギャップによる不透明な部分がいっぱいあります。私はやはり、山形県で少人数学級を試みたというあの全国的に先駆けて行った試みというのは大きな財産だと思います。やっぱり実践を積み重ねて、検証して発展させているわけですが、もっと深化させて、コミュニケーション改革のように具体的な施策が出ているわけであり、他県の施策と比べてみても山形県は素晴らしいと思います。そういった意味で、5教振の背景にある4教振の感性教育を関連づける。皆さんの話を聞いていてもそうじゃないですか。本質的なところをおっしゃっている。そして、教育計画を浸透させようとしているのですが、残念ながら現場の教員たちをリードする校長に難しさを感じていました。県の言っていることは間違いではなく、正しく、素晴らしいことだと思いますが、ただそれをいかにして学校の中で、教師自身が子どもと向き合う場面とかです。社会教育に携わっている人なども含めて、末端のところまではたして理念や指針が浸透できるかです。教育センターで研修に携わっているとき、「感性教育」、「心の教育」を講座に取り入れると、先生方はわからないものだから、その教育が哲学になっていくわけです。一人一人の生き方が違うわけですから。そうなってくると先生方はなかなかついてこれない。高校の校長をやっていたときも、それをベースに学校経営をしました。現場の先生は、最初についてはこれませんでした。ずっと言い続けると理解してきます。また、東北芸工大に宮島達男という人がいます。彼は、世界で町おこしを行うなど、芸術の分野において、世界で活躍している人です。彼から高校生に講演してもらった時、始めはどうして工業高校で芸術の話聞かせるのかという雰囲気でしたが、話を聞いているうちに、彼の芸術ではない、人間としての哲学を語ると、生徒たちも、一緒に聞いていた地域の経営者たちも、目を丸くして聞き入るんですね。そして、その先生がいる大学に入りたいと生徒が出てきて、その高校からの入学者がゼロだったのが、今はだいぶ来るようになりました。結局どういうことかという、県は本当のことをやろうとしていると思うのです。本当に必要だからやろうとするわけです。これだけは絶対譲れないもの、「いのちの教育」につながる感性教育が母体にあるとすれば、国が、世の中が何と言っても続けていったらいいと思います。そして、それは日本を越えて世界に発信できる教育だと思います。また、フィンランドは福祉国家であるから世界一の教育国になった。これは、みんなで助け合っていくということがベースにあるからですよ。

柴田委員： フィンランドでは、高齢化社会を迎え、素晴らしい国をつくるには経済を育て、そのために人を育てなくてはならないと考え、明確なビジョン・ミッションのもと、変わりました。日本もこれから経済はとんでもないことになります。その時に、高齢化社会の中で豊かな社会をつくるためにはどうすべきかというところをきちんと議論し、どういうふうに変えていくかを議論しないといけないと考えます。今、何が足りないかという、日本をどういう国にしたいか、山形県をどういう県にしたいかということが足りないのです。それを、国や県のせいにはしないで、一人一人が考えるべきです。教育も同じで、例えば、医者になりたいなら、小学校・中学校のうちから、今どうすべきかを考えるべきなのです。ビジョン・ミッションが明らかでないからダメなのです。仮説をきちんとたてて進むべきで、その場合、「いのち」というものがその仮説として正しいのかということになります。子どもたちに夢を与えるようなことをやっていかなければならないと思います。

## (2) 第5次山形県教育振興計画に基づく施策の取組み状況と課題について

事務局 : (資料6、資料7により説明)

池田座長 : 今日配付された資料ですので、まだ、委員の皆様方も、今、はじめて見て、難しいと思います。ただ、先ほどの議論の中で、どうしても評価というのはこうあってほしいと、ついてまわるものです。説明の中には「見直し」、「検討」という言葉がありました。少し時間がありますので、皆様から何かありましたらお願いします。

斎藤委員 : 5頁の「地域スポーツ」のところですが、地域総合型スポーツクラブとの連携などがあっていいのではないのでしょうか。天童市では、中学校区を単位として、中学生や高校生が参加して、体育の向上や健康の増進、地区民とのかかわりを図っていますが、そのような視点を入れてはどうでしょうか。8頁の課題のところ、「地域学習を進めて成果を上げるためには」とありますが、ここで一番大切なことは学社連携、つまり学校と社会、学校と地域をつなぐ窓口となる人が入っていないと、なかなかうまく進まないということです。天童市内では、教務主任を生涯学習指導員という形で位置付けていますが、その辺も考えてみてはどうでしょうか。

鈴木委員 : 私の意見資料2の3頁にあります、「自分には、良いところがあると思いますか？」の問いに対する山形県の小中学生と全国の小中学生の回答を比較したものがあります。皆さんに考えてほしいのですが、「自分はだめな人間だと思う」という日本青少年研究所が出した資料がありますが、その中で、「とてもそう思う」、「まあそう思う」を合せると、日本では6割以上の中学生、高校生がこれを肯定してしまう。この現実を考えてほしい。「いのちの教育」をしている割には、「自分には、良いところがあると思いますか？」という自尊感情、自己肯定感、自信など全国とさほど差がないのはどうなのか。考えるなり、工夫なりあっていいのかなと思います。一つのキーワードとして、「自らを立派と誇れる気持ちを育てる」を提唱したいと思います。事例として、寒河江市の醍醐小学校では、心の強さを育てるということを学校の大きな目標としています。校長自らが、「強さとは何だ。それは、美しさだ。美しさとは何だ。それは、やさしさだ。」、そういったことを一生懸命、話しています。私は、寒河江ロータリークラブにいるんですけども、「心の強さや美しさ」を育むというのをやっています。そこで、その内容の作文を寒河江市内の小中学校から募集しました。360の応募がありました。醍醐小学校は1年半、「こころの強さ」をやってきました。ものすごい文章ですよ、その内容も、言葉も、思い入れも。中学生よりも醍醐小学校の5、6年生は勝ちますよ。1年半やっただけでこれだけ変わるんだと思いました。これまで日本は、自分は世界に一人のかけがえのない存在であるとしたテーマでやっていたのですけれども、それよりも、自らを立派と誇れる気持ちが芽生えるように、それを尊い価値として、子どもたちに伝え育み、まずは教師や親が良き手本となることが大切なことなのではないかと思っています。

池田座長 : 私は、東北芸工大に勤めているのですが、全国から学生が集まってきます。実は、山形より宮城の出身の学生の方が多いのです。私は、教員として、指導主事として、校長として、様々な立場で教育に携わってきましたが、校長の時、感じたのが、気持ちが一つにならないことなんです。これは結局、大人になるまでの育ってくる環境の中で、大きな部分は育ってしまうからだろうと思います。いくら立派だとして採用された教員で

あってもそういうことが言えます。私は教員の研修にも携わってきました。研修の成果はあがります。しかし、研修はその方法やスキルを学ぶのであって、根っこの部分はどのようなかなと思っています。やはり、同じことを長く続けて言う。ねばり強く語り続ける。柴田先生が先ほど話しておられました。山形県だけで考えていると、内輪の中だけで考えているとどうなんだろうと思うんです。他に目を転じると以外と解決策が見つかるんですよ。うちの学生は、山形県が大好きなんです。ところが山形県出身の学生たち山形県好きじゃないんですよ。私の授業を受けている学生70人ぐらいにアンケート取ったりすると、残念ながら山形県出身の学生たちは、生まれ故郷の山形県について誇りや自信を持っていません。本当は都会に行きたかったが、家庭を考えて、親を考えて、自分の学力で、という言い方をします。ところが、他県から、都会から来ている学生はなぜかしら山形が好きですと言うんですね。そしてそのまま居座るんですよ。中には結婚して生活している。どうして君たちは山形にいるんだと聞くと「こんないいところないです。」と。山形県出身者だったら、「なんにもないですよ」と言ったり、「田舎だ」とか「自然」、「昔」、「伝統」とかたたき込まれており、未来につながる部分がなく、私も責任を感じています。都会の子どもたち、文明の最先端で生活してきた子どもたちは、根っこに持っている人間らしさというのは4年間で変わるんですよ。何が変わるかというところ、うちの理事長が、入学した1年生に「芸術は何のためにやるんですか」と質問するんです。ほとんどの学生が「自分のため」と答える。それが、卒業時に同じ質問をすると、ほとんどは「世の中のため」、「他人のため」、「他の人の幸せのため」に芸術をやるんだという結論を見出すんですね。それは、彼らは幼児期から自然と関わり、人間と語り山形県が進めている人間教育の根本は、身をもって親から、まわりから、美術や芸術を通して長年の中から培った基盤なんですね。だから目に見えるものだけが良さじゃなくて、目に見えないものであっても価値観をみつけるから、山形のすばらしい良さを知っているんです。私は、「世界遺産」について授業でやりまして、山形県出身じゃない学生たちにそのテーマを与えたら、わざわざ最上川まで歩いて行って、自分の肌で感じて、自分で資料で調べて、歴史を調べてレポート、作品にした。是非、理念として長年培ってきた伝統文化の中に、現在山形県が抱えている財産をもっと活かしてはどうでしょうか。例えば、高等教育では、長井工業高校などで生き生きした活動をしている。東北芸工大では、小山教授も根岸教授も感性がすばらしい。人と比べるとか、田舎であるとか、そんな偏見はありません。

柴田委員： これからの世界はアートの世界であり、サイエンスではありません。だから芸工大の役割は重要になってきます。だからサイエンス的なことをやってきている学校は、ちょっと考え方を変えなければならない。もう一つは、教育の原点とは何かということ。いろんな偉い人と話していてわかったことがあります。それは、たった一言、「母親が父親の悪口を言わない」ということなんですよ。世の中のほとんどの活躍している人たちは、母親が父親を敬えと、あんな泥まみれになって働いている父親を尊敬しろと言って。これが教育の原点です。末端で働いている人を尊敬しろと。それが多いですね。

池田座長： ありがとうございます。時間もまいりましたので、この辺にさせていただきます。

### (3) その他

池田座長： (3) その他について、事務局で準備しているものはありますか。

事務局： 本日協議いただきました1点目の「教育委員会活動の点検・評価」につきましては、様々な御意見をいただきました。さらに、9月17日まで御意見をいただくことになっていきますので、その段階で座長と相談させていただきながら、修正・加筆するとともに、今後の事務事業で参考にさせていただくこととし、報告書をまとめさせていただきたいと考えております。それから、2つ目の協議事項に関してですが、5教振の課題等の整理に向けての次回の懇話会は、11月中旬を予定させていただきたいと考えております。具体的な日時については、別途調整させていただきます。

池田座長： 2回目の懇話会は11月の中旬ということですので、よろしくお願ひしたいと思ひます。その他ござひませんか。

鈴木委員： 私の参考資料1の中にござひますが、「山形県の若者が日本を救う」というタイトルで講演しました。私も山形出身ではなく千葉出身です。だからこそ山形の良さがわかります。このサブタイトルは「山形県の若者が山形のすばらしさを語る」です。

池田座長： ありがとうございます。その他ござひませんか。それでは以上をもちまして、本日の協議を終了させていただきます。

## 6 閉会